

転校生はギャルJKなダークエルフ！？ 2章幕間

癒し庵もち猫 クアトロ

4-2:耳かきの末に

気持ちいい...。

他人にしてもらう耳かきが、こんなにも気持ちいいとは。

いやこの場合、人ではないが。

もうそんな事はどうでもいい。

日常的な夜更かしと、余りの心地良さに意識が薄れていく。

それにナナリーから放たれる甘い香り。

普通ならこういう場合、興奮する...というのが正しい男子の反応だろう。

しかも女の子の部屋だ。

悠長に眠っている場合ではない。

だが分かっていても抗えない眠気に、僕は勝てなかった。

ナナリーが何か言っている。

ナナリー「文字を書くの教えてくれるつつたじやん。」

そうだ。

文字の書き方を教える。

そう約束したんだった。

起きなければ。

頭では分かっていても、身体が言う事を聞かない。

とうとう僕はまどろみの末、眠ってしまった。

4-3:夢

夢を見た。

うっそうと生い茂る森...。

薄暗く、ジットリとしていて空気が重い。

木々の枝葉が擦れ合い、不気味な音を立てている。

だが不思議と「怖い」というよりは「懐かしい」、そう感じた。

何故だかは分からぬ。

頭上の木の葉から一滴の雫が落ち、僕の首筋に着弾した。

一瞬ビクッとなり、頭上を見上げる。

木々の隙間から見えている空は、どんよりとした雲に覆われており、そして納得する。

そうか、雨上がりなのだ。

冷静に状況を把握する。

しかしここは何処だ？

それだけが分からぬ。

その時だった。

“それ”は起つた。

正面から突風が襲いかかり、思わず両手で顔を塞いだ。

何だこれは。

考える間もなく、続いて周囲に轟音が鳴り響いた。

何が起つている？

耐え切れず、直ぐ近くの木陰へ避難する。

身を屈め、“それ”が収まるのを待つた。

数十秒後、“それ”は止んだ。

安堵の息が自然と漏れ出る。

が、安心はしていられなかつた。

直ぐ近く、およそ 10m くらいだろうか。

足音が聞こえる。

誰だ？

人か？

しかし僕は直感的に危険を察知した。

マズい！

顔を出してはいけない。

身体が、五感がそう叫んでいる。

このままやり過ごそう。

そう判断し、物音を立てない様、息を潜める。

その努力も虚しく、足音は真っ直ぐこちらに向かって来ていた。

5m....、2m....、1m....。

どうして？

僕がここに居ると、既に気付かれている？

直ぐ横で小枝を踏む音がした。

意を決して顔を上げる。

真っ先に長く鋭い爪が目に入った。

手？

だが人間の手でない事は、一目瞭然だつた。

木の向こうから、又ツと顔が現れる。

逆光で顔が見えない。

だが特徴的なそれは見逃さなかつた。

長く尖つた耳....。

これは...！

そこで目が覚めた。

まだ意識がハッキリしないものの、美味しそうな匂いがしているのは認識できた。

嫌な夢を見たせいか、身体が重い。

ゆっくりと身体を起こす。

ナナリー「あー、やーっと起きたー。もう夜になっちゃつたじゃん。」

そこでようやく思い出す。

そうか、ナナリーの部屋に招かれたんだつた。

ナナリー「君、耳かきが終わつたと思ったら寝ちゃうんだもんなー。」

スマホの時刻を確認する。

20時。

どうやら3時間ほど寝ていた様だ。

ナナリー「ねえ、聞いてるー？」

聴き手「ああ、聞いてる。」

ナナリー「今、晩メシ作ってつから、食べていきなよ♪」

聴き手 「いいの？」

ナナリー「気にすんなって。それにもう人数分作っちまつたからなつ。」

聴き手 「悪いね。じゃあ頂いていくよ。」

ナナリー「所でさー、文字の書き方を教えてくれる約束はどうなつたワケ？」

忘れていた。というか眠っていたというのが正しいか。

まだ眠気で頭にもやがかかっている様に感じるが、確かに約束した。

それも僕から率先して。

聴き手 「夕食の後でもいいかな？」

ナナリー「ナナっちは構わないけどさ、帰りが遅くなんない？」

聴き手 「ああ、それについてはご心配なく。」

ナナリー「へえ、そつか。んじゃあいいんだけど。」

その後、ナナリーの手料理を頬張りながら、夕食後の事について話し合つた。

それにしてもこの料理。

見た目はお世辞にも美味しそうと言えない代物だった。

だがひと口食べてみるとどうだ。

これまでに食べた事のない味だったが、手が止まらない。

聴き手 「これ、何て料理？」

ナナリー「これは牛肉を、特製のスパイスで炒めただけ。」

聴き手 「スパイスって？」

聞かなければよかつた。

ナナリーが差し出したそれは、いかにもという見た目だったのだ。

ナナリー「この事♪」

聴き手 「嫌な予感がするけど、何が入ってるの？」

僕はバカだ。

おおよそ人間が口にする様なものではない、というのがヒシヒシと漂っていた。

ナナリー「えっとねー、サソリにー、コウモリにー、スカラベの幼虫...、あと何だっけ？」

聴き手 「へえ...、変わった物を使ってるんだね....。」

冷静に。冷静に。

だが不思議とそれを聞いた後なのに、相変わらず手は止まらず、完食してしまった。

聴き手 「ごちそうさま。」

ナナリー「おうつ、おそまつさまー♪」

ナナリーもこの料理が気に入っているのか、ガツガツ食べている。

美味しそうに食事をする子を見るのは嫌いじゃない。

そして直ぐにナナリーも食べ終わった。

ナナリーは食器を片付け終わると、目をキラキラさせながら、僕の隣りに座った。

聴き手「何か近くない？」

ナナリー「そうか？なあなあ、早く文字の書き方、教えてくれよー。」

聴き手 「分かった。じゃあ始めようか。」

ナナリー「おう、よろしく頼むわ♪

一日でも早く書ける様になんねえと、色々とマズいかんなー。」

言いたい事は分かる。

聴き手 「そっか。えっと、先ずはナナリーの名前からだったよね。」

ナナリー「そうそう。早く早くっ♪」

凄く楽しそうだ。

それと子供の様にはしゃいでいる様は、ダークエルフである事を忘れそうになる。

そこでハツとした。

“いけない。本来の目的を忘れるな”

顔に出ない様、グッと表情を抑える。

ナナリーは何も気づいていない様だ。

相変わらずニコニコしている。

僕は鉛筆を取り、ナナリーの名前を書いてみせた。

聴き手「ほら、これがナナリー、君の名前。」

今朝の自己紹介で、ナナリーは平仮名で名前を書いていた。

だがおそらく、このカタカナ表記が正しいのだと思う。

ナナリー。

いい名前だ。

ダークエルフの見た目とは裏腹に、親しみやすさがある。

最も、僕は日々ゲームに没頭しているので、ダークエルフの外見に抵抗はない。

聴き手「書いてみる？」

ヨシを待っていた犬の様に、ナナリーは僕が持っていた鉛筆をひったくった。

ナナリー「へえ、これがナナっちの名前かー。早速真似して書いてみんぞ♪」

ナナリーは鉛筆を持つ、というよりは握って名前を書き始めた。

ナナリー「あー、何だか線がぐにゃぐにゃになっちまうんだけど？」

聴き手「鉛筆の持ち方、間違ってる。」

ナナリー「へ？持ち方なんてあんの？」

聴き手「うん。鉛筆貸して。」

ナナリー「ほい。」

聴き手 「持ち方は、こう。持ってみて。」

ナナリー「こ...こうか...? 何だか指がツリそうなんだけど?」

聴き手 「そんなに力まなくてもいいよ。」

ナナリー「ほーい。んじゃあ、こう?」

聴き手 「そうそう。それぞれの指は沿える程度に力を入れるだけ。」

ナナリー「っし、じゃあ書いてみつか。」

スラスラと彼女の名前が書き上がった。

凄い。

少し教えてだけで、もう線の引き方を吸収している...。

聴き手 「凄いね! こんな短時間で、凄く綺麗な字だよ!」

ナナリー「そ、そうか...? 余りそう言われるの慣れてねえから、何かハズいな...。」

何だか気マズい雰囲気になってしまった。

聴き手 「じゃ、じゃあさ、今夜はナナリーの名前と、挨拶を書く練習をして終わろう。」

ナナリー「わ、分かった。んじゃあ、お手本書いてくれよ。」

おはよう、こんにちは、こんばんは。

全部平仮名だけど、いきなり漢字はハードルが高そうだったのでこうした。

聴き手 「ナナリーは覚えるのが早いから、多分これくらい直ぐに書けるようになるよ。」

ナナリー「マジ? じゃ、じゃあ今晚はコレを練習しとくわ。」

相変わらず気マズい。

聴き手 「あー、僕、そろそろ帰るから。」

ナナリー「あ、そうだな。余り長居させちゃいけないんだった。つてもう真っ暗だけど。」

聴き手 「じゃあ明日。学校で。」

ナナリー「おうっ♪今日はあんがとな♪

気を付けて帰りなよー♪」

屈託のない笑顔が眩しい。

ナナリー「あ、でもさ。約束、忘れてないよね？」

聴き手 「調査に協力するって事だよね？」

ナナリー「そうそう♪見事解明して、森に還してもらわねーとなっ♪」

聴き手 「分かった。僕に出来る事なら協力するよ。」

ナナリー「サンキュー♪んじゃあ、また明日。お休みっ♪」

本当にダークエルフなのだろうか。

底抜けに明るい。

聴き手 「うん。お休み。」

そう言い残して、僕はナナリーの家を後にした。

4-4:転校日の翌日

朝。

登校してくると、いつも通りの喧噪。

昨日は帰ったら直ぐに寝てしまったので、今日は眠気はない。

もう間もなくホームルームの時間、という所で、教室の後ろのドアがガラリと開いた。

ナナリー「ういーっす...、おはよー...」

ナナリーは今日も気だるそうにしていた。

するとクラスメイトが一斉にナナリーヘ挨拶を投げかける。

ナナリーはたった一日でクラスの人気者へと登り詰めていた。

真っ直ぐ自分の席に歩み寄ると、ナナリーは僕にこう言った。

ナナリー「君、おはよ♪昨日の夜はさ、色々と教えてくれてあんがと♪」

その瞬間、ザワザワしていた教室が凍り付いた。